

# 嘉永期以前の石狩辨天社について

## Location of Ishikari Benten Shrine before Kaei Era

井口 利夫\*

Toshio IGUCHI\*

### 要 旨

北海道地方の伊能図は間宮林蔵の文化10年代の測量によるが、その石狩川口は現在の川口より2 kmも上流にあり、幕末期の石狩辨天社（現石狩八幡神社地）は川の中になる。文化10年代以降に辨天社が移転した可能性があり、また明治時代以降に川口砂嘴が伸長したのと同様に、幕末以前も川口が移動していた可能性が推測された。古文書の記録からは、文化3年から弘化3年の40年間で砂嘴は約1 km以上伸びて、川口の位置が動いたことが明らかになった。幕末の運上屋は現在の弁天歴史公園付近にあったが、古文書によると嘉永以前は約500m上流側にあり、辨天社は嘉永前後を通して常に運上屋より川口側にあったから、嘉永以前の辨天社も500m程上流の旧運上屋付近にあったと推定された。また辨天社・運上屋の移転のきっかけとなった石狩川の洪水は、嘉永4年（1851）ではなく、弘化4年（1847）だったと考えられる。

**キーワード：**石狩川河口地形の変化、石狩弁天社、松浦武四郎、元小屋、間宮林蔵

### はじめに

江戸時代の石狩～勇払の内陸部の正確な測量図は伊能図しかないが、アメリカ議会図書館で大縮尺（1/36,000）の大図（伊能大図<sup>1</sup>、以下、伊能間宮図、図1）の写図が見つかるまでは、北海道については小縮尺（1/216,000）の中図しか無かったため、細かい地形・地名の調査が出来なかった（井口，2007）。石狩川筋のアイヌ地名調査の際に、伊能間宮図を現在の地図に重ね合わせようとしたが、両図の川筋はうまく重ならなかった。石狩川の川道の変化が大きかったから、簡単に重ならないのは当然だが、最大の問題は伊能間宮図では石狩八幡神社が川口の中に入ってしまうことで、重ね方によっては現在の石狩辨天社さえ川の中になってしまうことだった（井口，2008）。石狩八幡神社の位置は明治8年（1875）までは石狩辨天社があった場所で、江戸時代には石狩辨天社は左岸川口近くにあつて、イシカリ運上屋からも程遠くない位置だったことは多くの古記録にあ

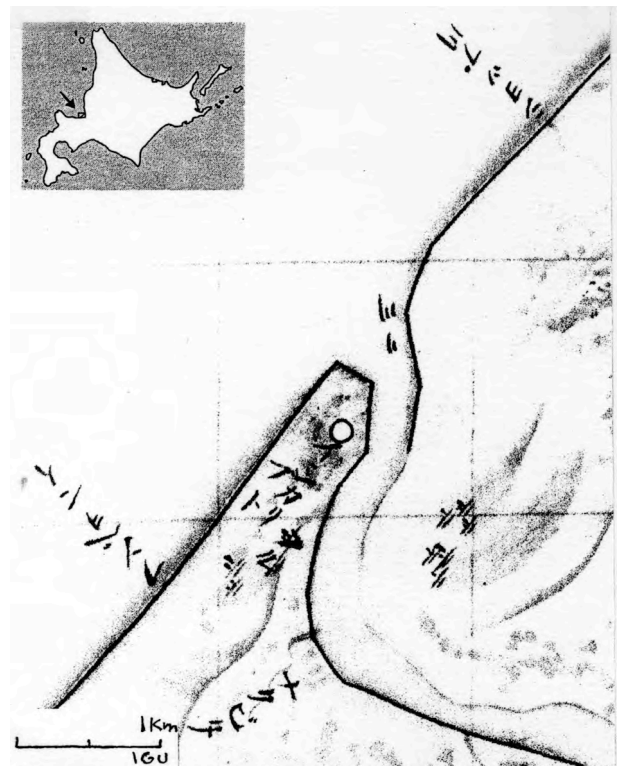


図1. 伊能間宮図のイシカリ川口。  
(原図1/36,000を1/50,000相当に縮小)

\*北海道史研究協議会 〒050-0077 北海道室蘭市天神町31-2

る。

『石狩辨天社史』（田中・石橋，1994）によれば，石狩辨天社は元禄7年（1694）に秋味漁管理の松前藩士の出願によって祠が創建されたことに始まり，その後もイシカリ場所の歴代請負人に漁業円満・航海安全の鎮守として崇敬庇護を受け続け，文化年間に当時の場所請負人阿部屋村山家によって社殿を再興したと伝えられる。その間，何度も改修，建替えが行われているが，その際に場所を移転したという記録が見られない。現在の石狩八幡神社には文化十年の銘のある大きな御影石の鳥居があり，辨天社には石狩八幡神社から移転した手水鉢なども現存しているので，石狩辨天社は創建以来ずっと現在の石狩八幡神社の場所にあったと信じられてきたようである。

若し石狩辨天社の位置が大きく移転したことがないならば，間宮林蔵の測量（伊能間宮図）は誤りだったということになる。

管見の限り，かつての石狩辨天社が江戸時代に移転していたという記録は無いようだが，若し伊能間宮図に誤りがなかったとすれば，間宮林蔵の測量した文化10年代（1813～）以降に，石狩辨天社の場所が動いていたはずである。

本稿は，「石狩辨天社は移転していたのではないか<sup>2</sup>」という過年から疑問について，改めて史料の再検討を試みたものである。

## 1. 幕末前の石狩川口は動いていないのか

そもそも石狩川の川口は伊能間宮図の描かれた文化年間から明治初年までの間に動いていないといえるのだろうか。

石狩川の川口が現在のように固定される以前は，川口の位置が年々移動していたことはよく知られている事実である。以下，既報（井口，2008の（1）イシカリブト）からその要旨を再掲する。

『石狩百話』に「石狩灯台が出来たのは明治25年。当時は二百メートル先が河口だったが，いまでは千五百メートルも離れたところが河口になっ

ている。」（鈴木，1996）とあるとおり，明治初年以降には石狩川口の砂嘴が何百メートルも先に伸びて，川口が北東に動いていたのは事実である。

『石狩河口変遷比較平面図』（編著者不明，1920年代）によると，明治6年（1873）から大正4年（1915）まで5回の実測図をもとに，この間42年間の川口の平均移動距離を約80尺（≒24m）／年と見積もっている。この内明治6年（ワッソン測量）から明治31年（廣井勇測量）までの25年間に移動した距離だけで約1,800尺（≒540m），大正4年までの42年間では約1kmになる。

これによれば明治6年の石狩川の川口は現在の川口より約1.5km南になり，幕末の松浦武四郎の来たころの川口は更に300mくらい上流の現在より約1.8kmくらい南になると思われる。

正確な記録の残っている明治初年以降の石狩川の砂嘴の変化（川口の移動）をまとめたのが図2

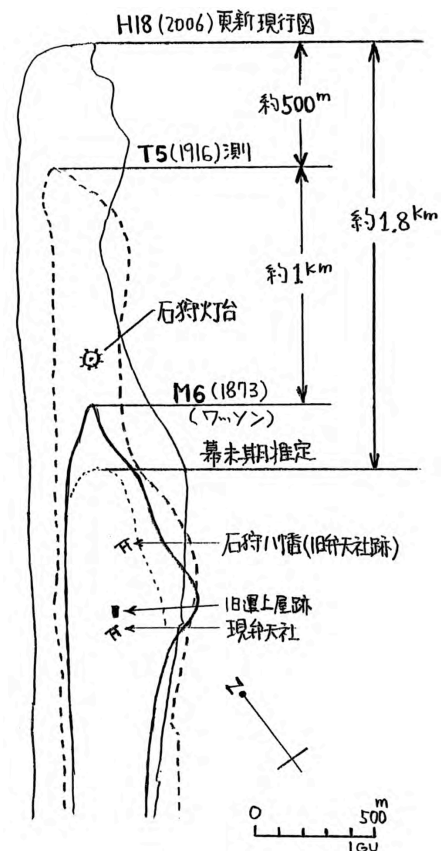


図2. 幕末以降の石狩川口の変遷。  
（井口，2008を一部改変）

である(井口, 2008)。

明治初年にこれだけの変化があったのだから、間宮林蔵の測量した文化10年代から幕末の松浦武四郎の時代まで、同じように砂嘴が伸び続けてきたはずなのだが、これまでの史書は川口の位置は幕末期以前はずっと同じだったという前提で書かれてきたように思われる。

間宮林蔵の測量した当時の、文化10年代初めの川口の位置は現在のどのあたりになるのか。

上述のとおり、重ね方により若干の差はあるが、以下の説明のための目安として、海浜線の移動量と石狩河口橋より上流の川筋の変化を考慮した場合の参考図を図3に示した。川口の位置は石狩八幡宮(旧辨天社)も運上屋跡とされる弁天公園の管理棟も川の中になっている。

伊能間宮図(図1)にある「○イシカリブト」という地名の上にある朱○印は「運上屋」(=イシカリブト運上屋)のある地名の記号と思われるが<sup>3</sup>、この地名の書かれた位置は伊能間宮図では川

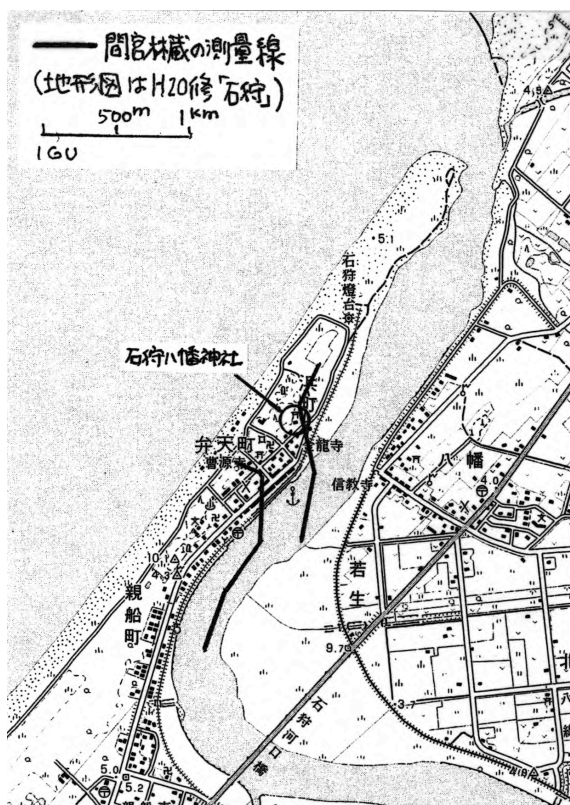


図3. 伊能間宮図のイシカリ川口の位置。  
(伊能間宮図を現行地形図の上に写す)

口より300mくらい上流の位置になる。単純に当てはめると、幕末の運上屋跡とされる弁天公園の管理棟からは約500mくらい上流(現在の石狩弁天社からでも400mも上流)の位置になると思われる。

## 2. イシカリ運上屋の移転の記録

絵図に見るかぎり<sup>4</sup>、石狩辨天社はいつの時代にも運上屋より下流側に建っていたようだから、辨天社が動いたとすれば、辨天社の近くにあったはずの運上屋(元小屋)も当然のことながら動いていたはずである。

石狩辨天社が移転したという記録はみつからないが、イシカリ運上屋が移転したことを示す記録はいくつか残っている。『石狩辨天社史』(1994)の注記の中に新札幌市史第一巻からの引用として

「イシカリは嘉永四年(1851)七月の長雨で出水し、イシカリの建物等すべて流され、運上屋、勤番所等は浜手に移動して昨年ようやく普請が完成した。」(下線=井口)

という記事がある<sup>5</sup>。

この記事は松浦武四郎の安政3年(1856)の紀行録「丙辰日誌 按西扈従 巻の九」(以下、「丙辰日誌」<sup>6</sup>)にある、次の記事によっている。該当部分の前後を「巻の十」も含めて引用しておく。

「(井口注=小樽の方から浜伝いに来て)

弁オイタイウシ 砂浜

ニイキリ

此処烽火台有。砂浜通りしばし行岡の方へ上り、左の方川口なり。此処にて

ベツブツ

と云則石狩の川口也。昔年見しより左、運上屋と勤番所は浜手によりしによって其故を問ふに、嘉永亥七月七日より廿日迄雨にて出水致し、建物不残流れ、漸々去年普請に成りたり。然し其場所は少し此処より高き様に覚ゆま、是へ上げたりと。此処に七不思議と云もの有て、此処は洪水の節に運上屋は水が著ざると云事も其七ツの一なりし

が、此一つは左もなかりし也。惣流れに流れたるとて一同一笑致し、魚見の下を廻りて着したりける。

……

(巻の十)

石カリ運上屋

此処本名はベツブツ則川口と云事なり。……  
元運上屋の有し処の字は其より少し上なるトクヒラを以て其字とするなり。

……

運上屋一棟(梁八間、桁廿四間半)、是を元小屋と号く。……

武器蔵一棟……、勤番所一棟……、……

神社、弁天社、稲荷大明神、並に妙亀法鮫と申此川の靈を合せ祭り、其傍に童神の社有。各近年の普請にして見事なり。……」

(下線=井口)

つまりイシカリ運上屋は嘉永4年(1851)の洪水によって流され、以前の場所より川下(海側から見て左手)の海側に寄せて再建し、辨天社なども近年普請した、という。ここに「昔年見しより」とあるのは弘化3年のこと(松浦武四郎, 1851, 『三航蝦夷日誌』中の「再航蝦夷日誌」7. 以下「再航蝦夷日誌」), 七不思議の話(後出「注13」参照)もこの時に聞いた話である。

移転後の運上屋の場所について、松浦武四郎は「浜手に寄りし」としか書いていないが、同じ安政期の『野作東部日記』(榊原・市川, 1857)では、

「(運上屋は=井口注) 海岸ヨリ二丁半」

つまり、運上屋は海岸から約250mのところであり、『観國録』(石川, 1857)では運上屋から川岸までの距離について、

「東北ニ二丁許ニシテ川端ニ出ル。」

とあって、川端まで200m超くらいである。したがって、当時の砂嘴の幅は約450~500mくらいで、運上屋は丁度その中間くらいにあったことになる<sup>8</sup>。

運上屋が約500m移転したのが事実とすれば、そ

の附近にあったはずの辨天社もこの洪水を期に移転したのだろうという推測ができる。

### 3. 旧運上屋の位置の推定

上記「再航蝦夷日誌」の運上屋が安政2年(1855)に移転したという記事を裏付けできる記録を探すと、先の「丙辰日誌」の続きにも洪水によって移転する前の旧運上屋の位置を推測できる記事がある。

「……(五丁、針位辰)

フル

此処元運上屋の有し処也。此向ひの方に当りて

ワツカウイ 並て引場

トクビタ 引場

元の渡し場也。秋味引場有。……」

(下線=井口)

とある。更に、翌安政4年(1857)の記録「丁巳日誌」(松浦, 1857)の「再こう石狩日誌 巻の一」5月19日(陽曆6月10日)の記事にも、

「 石狩運上屋

……

フル

右岸平地。当時雇蔵の四五丁上なる元運上屋の跡なり。此処土人小屋四軒を見る。……」

(下線=井口)

とある。

いずれの記事にも、移転後の運上屋より川上の「フル」という場所が、元の運上屋の位置だと書いている。その場所は、前者では5丁(約550m)、後者では4~5丁(約440~550m)としている。

松浦武四郎は、移転後の運上屋は砂嘴の中段にある(現在と同じ)が、移転する前の運上屋より浜側によった、と書いている。つまり、以前の運上屋はもっと川岸に近い位置にあったことが推測される。当時の他の紀行からも、移転する前の運上屋が石狩川の川縁にあったとする記録がある。



せしなり。……

當社は……文化十三乙亥年松前神明神主白鳥伊豫  
迂宮致し候なり。此處をホリカムイといふ<sup>11</sup>。  
……」（下線=井口）

つまり、洪水のあった時期について、先の「丙辰日誌」の嘉永4年（1851）より4年早い弘化4年（1847）としている。

洪水が弘化4年だったとすれば、辨天社史の年表の記事、

「一八四八 戊申 嘉永一  
七代村山伝兵衛（金八郎）石狩辨天社を再建」

という嘉永元年（1848）の辨天社再建の記事と時期的に符合する。

この記事の根拠になる記事は、同上年表の明治17年（1884）の記事

「一〇月村山家履歴調べ報告（加藤円八外旧雇人作製）に、「辨天社ノ義ハ……嘉永元戌年更ニ再建方今郷社ニ用ユルモノ即是ナリ」と記載されている。」

によると思われる。

ここで「嘉永元戌年」は「戊申年」の誤記であろう。嘉永元年は明治17年の36年前のことで、この件についての当事者はまだ存命中だったはずであり、十分信頼出来る記録と考えられる。また、本記事の表現が単なる「修理」ではなく「再建」であることから、旧社が洪水で大きく損なわれていたことも推測される。

一方、洪水を弘化4年（1847）とすると、運上屋が安政2年（1855）まで8年間も再建されなかったことになる（嘉永4年（1851）からでは4年間）。この点については、蝦夷地再幕領化（安政2年）以前には交通量も少なく、場所請負人にとっては余り支障が無かった、などの背景も推測される。

松浦武四郎の記録の信頼性からいえば、「丙辰日誌」は調査直後に書かれた公式の報告書であり、『西蝦夷日誌 五編全』（文久4年自序、明

治4年刊<sup>12</sup>）の方は後年にまとめ直した一般向けの概説書とされていて、史料価値は前者の方が高いとされる。ただこの件に関する限り、前者の記事も伝聞による情報であるから、後日の調査で誤りを訂正したということは十分考えられる。

運上屋が流されるほどの洪水であるから、他にも記録がありそうだが<sup>13</sup>、管見ながら過去にこの点に触れた論考は未見である。ここでは洪水のあった時期は、辨天社の再建記録と一致する弘化4年（1847）と考える<sup>14</sup>。

## 5. 文化年間の川口と運上屋の位置

運上屋の移転が確かになり、石狩八幡神社の位置が文化年間の地図では川の中になることがあり得ること、イシカリブト運上屋が伊能間宮図の「○イシカリブト」地名の附近にあったことについても、ほぼ信用して良さそうに思われる。

移転前の運上屋の場所を推定するため、川口から運上屋までの距離を推測できそうな伊能間宮図に近い時期の史料について検討する。

文化3年（1806）の『遠山・村垣西蝦夷日記』の記事に、

「四月二十日ヲタルナイ川端陸地通出立

……

石狩 海路六七町引込候溜、勤番所有之、  
松前若狭守家来上役老人下役兩人相  
詰候。石狩川附の諸役所、運上屋、  
漁小屋、蝦夷家も有之候

……

六月十一日石狩川出立。船路十四五町川上、南の方え罷越、

トクヒラ 川端右の方、蝦夷家三軒有之。右鮭の  
漁場に御座候由、……」

（下線=井口）

とある。石狩の勤番所・運上屋のある場所は川口から6～7丁（約660～770m）上った所だったとする。

この川口から約700mくらいという数字は伊能間宮図の川口からイシカリ運上屋までの川沿いの

距離とよく合っている。

ところが、同じ一行の遠山景晋の『未曾有後記』には、

「六月朔日（五時出）。海岸三里を経て石狩止宿（九時到着）……  
十一日（五時過出）  
川の西北は海に入れども、屋舎は拾丁余も上がりて川涯に有。……」

とあり、「屋舎」が何を指しているのかは不明だが、当時13軒あった運上屋の1つ<sup>15</sup>であろうから、距離的には幾分の差はあるにしても、川口から10丁余（約1.2km余り）も上がった川岸という、先の記録とは300～400mも違いがある。

ここでは伊能問宮図との整合性からも前者の記録、運上屋は船路で川口から約700～800m程度だったと押さえておく。

前出の松浦武四郎の記録から、移転前の運上屋の位置「フル」は幕末の運上屋から500mくらい上流の位置と推定されることから、これによって当時の川口の位置も逆算できそうである。

なお、上記の『遠山・村垣西蝦夷日記』の記事「船路十四五町川上、南の方え罷越、トクヒラ……」にあったように、移転する前の「イシカリ運上屋」の位置をマクンベツ・トクヒラという地名からの距離で示している史料が、この他にも2、3ある。

松浦武四郎の「再航蝦夷日記」の「蝦夷行程記」<sup>16</sup>には、

「從石カリ運上 トクヒラへ 十八丁  
從トクヒラ マクンベツ 十丁」

とあり、イシカリ運上屋からトクヒラまで約2km、トクヒラからマクンベツまで約1kmとされる。

明治20年図のマクンベツを起点にすると、先に検討した伊能問宮図の川口より500m上流にあたり、伊能問宮図の「トクヒラ」の位置を起点にしてみると、運上屋の位置は伊能問宮図の「○イシ

カリプト」の附近にほぼ重なることが分かる。ただ、川上側からの位置の推定には、アイヌ地名の特定に不確かな点も残っているので、ここでは川口からの距離によって推測することにした。

問宮測量時代から30年後の弘化3年（1846）松浦武四郎の『再航蝦夷日記』には、

「海口より凡二十丁計も上りて運上屋へ到るなり」

とあって、川口から運上屋まで約2kmとしている。

前述の文化3年（1846）の遠山・村垣の記録と比較すると、この間の40年で砂嘴の伸びによって、川口の位置は約1～1.4km（文化3年の2つの記録では300～400m差がある）も先へ移っていたことになる。

この川口の変化の様子を図解したのが図5。で、実線で示したのが文化3年（1806）の遠山・村垣の時代の状況、破線で示したのが弘化3年（1846）の松浦『再航蝦夷日記』の時代の状況である。

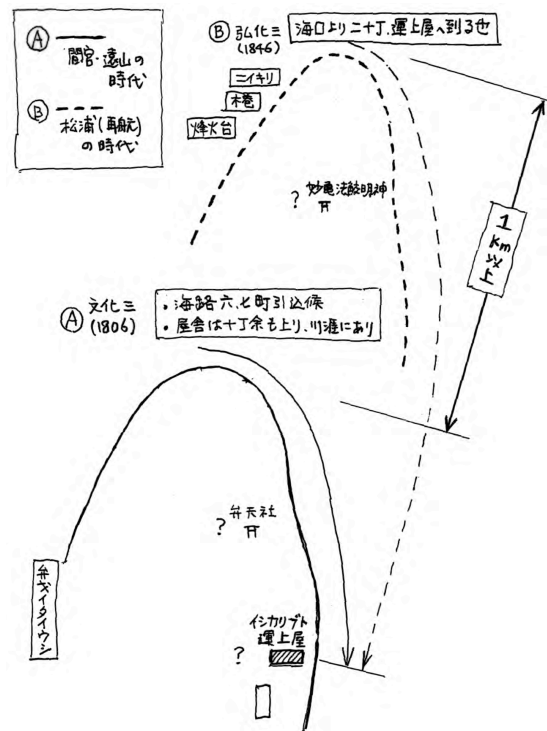


図5. 文化～弘化約30年間の川口砂嘴の変化。  
A：問宮・遠山。B：松浦武四郎（再航）。

## 6. 移転以前の運上屋附近の景観

石狩辨天社が移転再建されたことはほとんど確実になった。では、洪水以前の辨天社は何処にあったのだろうか。

弘化以前の石狩川口附近の絵図はかなり残されているが、辨天社が描かれているものは宝暦年間（1750年頃）と考えられる飛騨屋久兵衛関連の『石狩山伐木図』、寛政4年（1792）の御救交易一行の小林源之助の『蝦夷地見取絵図』、天明8年かとされる『西蝦夷地分間』<sup>17</sup>（作者不明）、文化末年の『イシカリ川の図』（作者不明）くらいで、この内『西蝦夷地分間』を除いた3図には「辨財天」「弁天」とあるが、これらの絵図からは辨天社が運上屋その他の建物郡より川口に近い方であったらしい、という程度の情報しか得られない。

先に引いた『西蝦夷地高島日記』にも、運上屋境界の当時の賑わいぶりには触れているのだが、辨天社についての記述が無い。一行は陸路を浜伝

いに来て、川口まで行かずに運上屋に向かっている。辨天社が目に入らなかったとすれば、運上屋からはやや離れた場所にあったためかもしれない。

このように、洪水以前の川口附近の詳しい建物の配置や辨天社についての情報はごく少ない。間宮林蔵の測量より30年近くも後の記録になるが、弘化3年（1846、洪水の前年に当たる）の松浦武四郎の前記「再航蝦夷日誌」にやや詳しい記事があるので、関連する部分を抄録する。

「勤番所 運上屋の前方ニ立たり。……  
運上屋 南向、甚大なもの也。……  
魚見台 高サ凡四丈位也。……  
蔵々 勤番所之裏の方ニ有。弁天社の道の傍  
西方凡二十余戸有り  
塩切長屋 川岸ニ立たり。……  
弁天社 運上屋の裏ニ有。石鳥居、石灯籠を建たり。柵皆石にして甚美々敷もの也。」

（下線＝井口）

辨天社の位置については、「運上屋の裏」で、



図6. 弘化3年（1846）頃の石狩川口の状況（石カリ川の圖）。  
（松浦武四郎、秋葉本挿絵を一部改変）



「蔵々」が「勤番所之裏の方ニ有、弁天社の道の傍両方凡二十余戸有り」とあって、位置関係はやや分かりにくいですが、運上屋の裏手、それほど遠くない場所と推定できる。

この「再航蝦夷日誌」の挿絵にの中に当時の川口附近の様子を描写する「石カリ川口の圖」<sup>18</sup> (図6)がある。

諸建物の位置関係が推測出来る諸図の中で最も詳しい絵図だが、日本画の手法のくせがあるので、実景との相違をどう見るかの判断は難しい。

上記に抄録した記事とも内容がやや異なる点があって、そのまま鵜呑みにはできないところはあるが、運上屋・勤番所・辨天社・妙亀法鮫明神などの凡その配置が推測できそうである。以下、参考のため大凡の配置を推測してみた。

『再航蝦夷日誌』の辨天社の説明にある「……石鳥居、石燈籠を建てたり。柵皆石にして甚美々敷もの也」とある石鳥居・石柵のある辨天社の姿は、現在の石狩八幡神社の姿を彷彿とさせる描写である。

この記録にある「石鳥居」は現在石狩八幡神社にある「文化十年奉納」とあるものと同じものと思われ、「石燈籠」は現在は辨天社地内にある「文政十二年奉納」のものと同じものと思われる<sup>19</sup>。

一方「石柵」については『石狩辨天社史』その他にも記録がない。現在の石狩八幡神社境内にある石柵は軟石製で、内側のものは「大禮□□」「昭和三年十一月十五日」などの銘があり、外側の道路に面しているものは「大正十年三月五日」の銘があって、いずれも当時のものではない。

「石柵」が再建時には移設されなかったのか、当時のものが何処かに残っているのか、この点については調査できなかった。

## 7. まとめ 一移転以前の運上屋・辨天社の位置の推定一

弘化4年(1847)の洪水によって、運上屋が流失し、従来の位置より約500m下流側へ移転したこ

と、またその洪水を期に辨天社なども移転したことがほぼ明らかになった。

移転前のイシカリブト運上屋が、文化年間に間宮林蔵が測量した伊能間宮図に書かれている「○イシカリブト」の、地名附近の川岸にあったことも確かになった。

ただ、元の運上屋のあった辺りの川岸は、大正5年(1916)測図(陸地測量部, 1918)の川岸に比べても約70mも削られている。更に100年も前の当時の状況は、単純に伊能間宮図から推測しただけでも150mくらいは後退している。当然のことながら、元の運上屋の附近一帯は既に水没しているはずである。

従って「運上屋の裏の方」にあったはずの、移転前の辨天社の位置を推定する手掛かりはまだまだ足りないのだが、元運上屋や辨天社の位置を推測するため、ここまで検討してきたことを図7にまとめてみた。

移転前のイシカリブト運上屋の位置は「フル」近くの川岸附近と推測される。

現在の川岸附近の様子から推測される当時の地形で注目されるのは、ここより上流側の土地の標高は+2.5~5mだが、ここから下流側の土地が急に低くなっていることである。この土地の落差が何時頃からあったのかは分からないが、ここより下流側の川岸には立地しにくい地形である。

また、この附近の裏手、浜側には+7.5mを越える砂丘がずっと続いている<sup>20</sup>。松浦武四郎の安政4・5年の記録にみえる旧運上屋のあった場所の地名、

「フル 此处元運上屋の有し処也。」

「フル ……元運上屋の跡なり。……」

という「フル」はアイヌ語で「丘」の意味だから、往時はこの附近から砂丘が続いていたのだろうか。

また2. で引用した松浦武四郎の安政3年の記録の中に、

「……昔年見しより左、運上屋と勤番所は浜手によ



りしによって其故を問ふに、嘉永亥七月七日より廿日迄雨にて出水致し、建物不残流れ、漸々去年普請に成りたり。然し其場所は少し此処より高さ様に覚ゆまゝ是へ上げたりと。……」(下線=井口)

とある「……其場所は少し此処より高さ様に覚ゆまゝ是へ上げたり」という記事の意味が、この地形を参考にすると分かりやすい。

つまり、長年の砂嘴の延びによって、元の運上屋は川口から大分遠く(約1km)なってしまっていたので、再建に当たって川口に近い場所へ移転を企てたのだが、川端一带はずっと低地になっていたため、川端より250m以上も浜側の土地の高くなった場所へ寄せたのだが、それでも元の位置の方が少し高かったように思える、ということであろう。

移転後の辨天社も土地の高くなったギリギリの場所を選んで建てられていることがわかる。

以上のように、旧運上屋の想定位置は松浦武四郎の記録する描写とも矛盾は無いようだ。

移転前の辨天社の位置について考えると、前述のとおり辨天社はいつの時代にも運上屋の川下の川口側にあったことは確かである。また「再航蝦夷日誌」によれば、辨天社と運上屋の間の道の「傍」には「蔵々」が両側に「凡二十余戸有り」建っていたとある。蔵々は両側に20戸ずつなのか、両側合わせて20戸なのかこれからだけでは判断できないが、挿絵のイメージや地形から考えると、その距離は凡そ200~300mくらいはあったのではないかと想像される。

図7の旧運上屋の想定位置から伊能問宮図の川口の位置までは約400mくらいだが、図6の描かれた弘化3年頃は文化3年(1806)に比べて1.1~1.4kmくらい砂嘴が伸びていたから、この頃には運上屋から川口までは約1.3~1.5kmくらいあったことになる<sup>21</sup>。

松浦武四郎の川口の絵図(図6)を見ると、この約1.3kmくらいの間に辨天社・妙亀法鮫明神があったことになるが、川口に近い位置に妙亀法鮫明神があり、運上屋までの中間よりやや近い位置に辨天社があるように描かれている。

安政2年(1855)とされる『西蝦夷地イシカリ御場所絵図』<sup>22</sup>(田中實ほか, 1994)には、神社4棟が描かれているが、3棟並んだ神社から離れた川口側の神社1棟に「妙鮫/法亀」とある。同図の記事には「稲荷社、弁天社、亀鮫社、龍神社、四棟」とあるから、この離れた1棟が妙亀法鮫明神を指すと思われる。前出の松浦武四郎の「丙辰日誌」では「傍に竜神の社」とあり、離れた1社が何かはやや疑問も残っているが、ここでは絵図に従ってみた。

以上、約1.3kmもある範囲での推測では全く雲をつかむような話で、ほんの試み程度ではあるが、今後の検討のための手掛かりとして、辨天社と妙亀法鮫明神の凡その推定位置も図7に示してみた<sup>23</sup>。

石狩辨天社、運上屋の移転が確かになり、問宮林蔵の測量結果はほぼ信頼できることが確かになり、当時の石狩川口(アイヌ語で「イシカラ・プッ」又は「ペッ・プッ」<sup>24</sup>。以下、イシカリブト)のおおよその位置が推定できた。問宮林蔵の見た当時のイシカリブトと、弘化3年に松浦武四郎が初めて見たイシカリブトとは、およそ1kmも違う場所だったらしいことも分かった。

石狩川口部の変化の様子が推測できるようになり、江戸時代のアイヌ地名の研究をする上で、大きな手掛かりがつかめた。

## 今後の課題

もとより土地勘の無いために、思いがけない勘違いをしている恐れもあるが、現在までの検討結果を報告し、管見浅学故の過誤については、諸兄のご批判を仰ぐことにした。

石狩の地は此処に生活や活動の拠点を置いた人々の長い歴史があり、蝦夷地の中心地として重要な史跡・文化財が多く残されている土地というだけでなく、かつて此処を訪れた多くの旅行者の記録が残された土地でもある。

本報によって往時の石狩川口附近の姿を幾分は再現出来たように思うが、各時代毎のイシカリ場

所の様子を細かく描き分けるには程遠く、まだまだ調査が不十分である。

特に間宮測量以前の地形の変化については文献史料の限界があつて、イシカリ場所開設以来の川口や活動拠点などの具体的な検討には、地学・考古学的手法での調査が不可欠と思われる。

また、弘化3年以前の辨天社の様子もまだ漠然としているし、再建後の石狩辨天社についてもまだ分からないことが多いようである。

本論では触れなかったが、郷土研究会村山会長の御先祖村山ソノ様の土地が、幕末の運上屋近くの現辨天社地の他に、移転前の旧運上屋のあった附近一帯にもあることが分かり、何らかの繋がりがあつたのではないか、と思われた。

また、石狩下流域でのアイヌの人々の生活の様子もほとんどつかめていないように思われる。アイヌ地名は往時の地形や生活を反映しているから、石狩川最下流部の地形の変化を推測できたことから、アイヌ地名の位置のより確実な復元、生活の復元への手掛かりになると思われる。

**謝辞：**本件の調査にあたっては、いしかり砂丘の風資料館各位・石狩市郷土研究会各位より御教示を頂き、また工藤義衛氏・志賀健司氏には査読の上、貴重な御指摘を頂きました。記して感謝の意を表します。

注1 アメリカ議会図書館で発見された伊能大図は、明治初年に旧陸軍が上呈図の伊能家副本から模写したものとされ、近年になって複製やデータの利用が可能になった。文政4年(1821)上呈の原本『大日本沿海輿地全図』は江戸城紅葉山文庫に秘蔵され、明治になって出庫後に火災で失われた。それに代えるべく伊能家から献納された副本は、帝大に下賜されて帝大図書館に架蔵されたが、関東大震災によってこれも失われた。中図・小図は天文方の手による原本相当のものが多数残っているが、大図はごく一部があるだけで、そのため「幻の伊能大図」とも称された(井口, 2007)。伊能図の内、北海道部分は寛政12年に伊能忠敬が測量した東蝦夷地部分と、文化10年代に間宮林蔵が測量した西蝦夷地部分を合わせて完成したといわれていたが、近年の研究によって、全道総て間宮林蔵の測量であろうといわれるようになっていく(井口, 2005; 渡辺ほか, 2014; 2015)。そのため、伊能図の北海道部分について本論では「伊能間宮図」とし、引用文献リストでも著者を「伊能忠敬・間宮林蔵」とした。

注2 ここにいう「移転」とは石狩辨天社が明治8年(1875)に石狩八幡神社から現在の位置へ移転したことではなく、

幕末より以前には、石狩辨天社は現在の石狩八幡神社の位置よりもっと上流にあつて、その後、現在の石狩八幡の位置へ移転したのではないかと、という疑問のことである。

注3 この地名の頭にある朱○印は、他場所の記載例からみると、この地名の土地に運上屋があることを示している。「○イシカリブト」についても、○印が運上屋の位置を示すものでないことは、当時の運上屋が川岸にあつたとする他の記録からも明らかである。

注4 嘉永以前の『飛騨屋久兵衛石狩山伐木図』(著者不明, 1750年代)・『蝦夷地見取絵図』(小林源之助, 1792)・松浦武四郎(1851)「再航蝦夷日誌」挿絵、嘉永以後の「石狩真景」(今村次郎橋, 1856頃)・「イシカリ場所絵図面」(著者不明, 1859頃)・『西蝦夷地唐太道中記』(著者不明, 1859頃)などがある。

注5 この引用はp663によるもので、p841には「安政元年(一八五四)七月の長雨…」とあり、安政元年は嘉永7年なので、後出のように原文「嘉永亥七月七日」を嘉永7年七月と誤読したものと思われる。

注6 高倉新一郎翻刻の北大附属図書館本の外題から『竹四郎廻浦日記』として流布しているが、この外題は箱館奉行所で付けたものらしく、丁巳日誌にも同じ外題が付されていることが知られており、この外題を用いるのは適切でない。分冊の内題は『按西扈従』『按北扈従』『按東扈従』で、松浦孫太翻刻ではこの内題を用いている。『北蝦夷余誌』庚申凡例では本書を「丙辰于役の記行」・「函館府に納る丙辰の記行三十余巻」と称しているところから、ここでは「丙辰日誌」を用いる。

注7 松浦武四郎のこの時の紀行録は吉田武三校注本の書名は『三航蝦夷日誌』で、石狩の部分は「再航蝦夷日誌」にあり、一般的にはこの書名で通用している。ここでは秋葉實編『蝦夷日誌 二編』から引用しているが、広く通用している「再航蝦夷日誌」の書名を用いる。

注8 この附近の砂嘴の幅は現在では約600mくらいで、運上屋の位置は海岸から約350m、川岸まで約250mある。約150年で海浜の幅は約100m成長した計算になる。

注9 『西蝦夷地高島日記』は井上貫流左衛門一行の高島からの帰府の記録で、著者について高倉新一郎は『新しい道史43』で齊藤治左衛門とするが、田端(2006)は山崎新九郎であるとしている。ここでは田端説によつた。

注10 イシカリ運上屋はイシカリでは元小屋とも呼ばれていた。工藤(2009)によれば、運上屋は石狩弁天歴史公園の場所にあつて、幕末には本陣と改められ、明治4年に廃止になった後は駅通所として使用されたが、明治9年の石狩大火の際に焼失した。

注11 「此處をホリカムイといふ」という「此處」は、その前の「此處へ移せしなり」と同じ場所、つまり川下へ移転後の辨天社の場所を指している。一方『石狩町誌 下』で「当初『石狩辨天社』は石狩川口に位置していたが、一八一五〔文化一二〕年に川上のホリカムイ(現在の弁天町一番地、石狩八幡神社所在地)に遷宮し、…(下線=井口)」とあるのは、後述の砂嘴の伸びによる川口の移動を想定しないための誤解であり、「川上」への移転はありえない。

注12 刊行年は高木崇世芝(2001)による。

注13 『石狩町誌 上』本文と巻末「概説年表」に「弘化二年に石狩川が氾濫し堤防が決壊して、その被害も少なくなかった…」と記している。同様の記事が『新北海道史年

表』にも採られていて、その出典を「石狩場所請負人村山家記録（『石狩町史資料』3）としている。ただ、この翌年の松浦武四郎「再航蝦夷日誌」には、「…山々岳々より落来る衆川、皆此川口ニ来るに、如何計の雨ツゞキなりとも如何にも水の増すことなし。川上一里ニ而五尺も増たるニ、此処纔三寸位なりとかや。又此処に七不思議と云うもの有。…先右の水増ざる事、…等なり」とあって、全く逆の話題を紹介している。上記で出典とされた資料（長谷川、1973）は河野常吉の抄録資料の翻刻で、2箇所にはほぼ同内容の記事があるが、原点の信頼性は不明である。年次に「乙巳」と明記されているものの、二年は四年の誤りではないかとも思われ、また、後年の『石狩辨天社史』には採られていないこともあって、本文では採り上げなかった。

注14 工藤義衛氏の御教示によれば、嘉永元年の再建が洪水によるものであるとすれば、「嘉永二年」の年次銘の辨天社関係主要遺物「毘沙門天御身體御修覆成就神札」「大黒尊体御身體御修覆成就神札」の年次について、辻褃の合う説明ができるようになる。とのことである。

注15 先の記事に続いて「爰は蝦夷第一の大湊にて運上屋十三軒あり」とあり、高倉新一郎の補注に「松前藩は石狩川沿岸地帯を十三の場所に分け、各場所の交易権を知行として家臣に与え、家臣は各運上屋を設けてアイヌと交易したが、石狩では運上屋は各場所になく、石狩川口に軒をならべていた。各場所の蝦夷はここまで来て交易したのである。文化六年、幕府は石狩場所を一つに統合し、従って運上屋も一つになった。」とある。当時は運上屋13軒の時代で、間宮林蔵の測量の頃は運上屋1軒の時代である。

注16 この「蝦夷行程記」は松前藩士今井八九郎の作と考えられているが、同人作の『蝦夷地理数書入地図』（今井、1830年代）にも、イシカリ會所（ママ）とトクヒラの距離を「十八丁」、トクヒラとマクンベツの距離を「十丁」とする同じ記事がある。

注17 『西蝦夷地分間』の函館中央図書館蔵本は「景晋」印があり、遠山景晋旧蔵とされ、高倉新一郎は『北海道古地図集成』で文化年間と推定している。一方、東大史料編纂所蔵本は「天明八年／寛政十年近藤重蔵控」とあり、近藤重蔵は天明8年としている。ここでは後者の年次を採った。

注18 本図は松浦武四郎自筆本でもやや相違があり、吉田武三校注の吉川弘文館版『三航蝦夷日誌』（底本は松浦家蔵本。以下、吉田本）では「イシカリ運上屋之図」とあり、秋葉實翻刻『校訂 蝦夷日誌』（底本は道立文書館蔵本。以下、秋葉本）では「イシカリ川口の圖」とある。秋葉本では「運上屋」の文字が筆耕漏れになっているが、吉田本の挿絵は校注者の模写で史料として不適当なので、ここでは秋葉本の挿絵を一部改変して示した。

注19 これらの遺物について『石狩辨天社史』には次のように詳記されている。

「石狩八幡神社 鳥居  
石質 兵庫産の白御影石（花崗岩）  
高さ 四メートル五〇センチメートル  
彫字（右石柱）  
表面 奉 海上 願主當場所請負人中  
同秋味建船中  
裏面 文化十年  
（左石柱）  
表面 納 安全 願主栖原屋半助  
米屋孫兵衛

裏面 癸酉八月吉日  
石燈籠 一對（石狩辨天社地内）  
石質 白御影石  
高さ 一二三センチメートル  
彫字 表面 御神燈  
裏面 文政十二丑五月吉日  
横面 施主 村山 栖原 」（

注20 この砂丘の南方は現在は広大な凹地になっているが、これは1972オリンピックの際の道路建設用資材として採掘された跡とのことで、昭和25年測図（地理調査所、1953）ではこの砂丘はずっと南へ続いていたことが分かる。砂丘は砂嘴の先端部には出来ないようだから、文化年間の間宮林蔵の測量の当時の砂丘の先端はこの附近だったのかもしれない。地名「フル」（＝丘）はその砂丘の先端附近の地名だったかと思われる。

注21 文化3年（1806）から弘化3年（1846）まで40年間の砂嘴の伸び1.1～1.4kmは、年率に直すと25～35m/年で、明治～大正期の推定24m/年よりやや大きい。ここでは30m/年として、伊能間宮図より約30年間で900mとみた。

注22 藪内於菟太郎（1858頃／安政5頃）『蝦夷全地』北海道大学附属図書館蔵にも、同名、同内容の「西蝦夷地イシカリ御場所略絵図」があるが、この図には離れた1棟の神社への注記は無い。

注23 安政2年の「妙鮫／法亀」社の位置が、弘化3年の松浦武四郎の描く（図6）「妙亀法鮫明神」の位置から移っているのかどうか、全く不明なので、図7では2箇所を示した上で「同じか？」とした。

注24 「イシカリ」のアイヌ語語義・表記には諸説あり、ここでは山田秀三（1965）によった。「イシカラ・プッ」は丁寧表現すれば「イシカラ・ベツ・プッ＝イシカリ・川口」だが、大河では大抵「ベツ」が省略される。また、アイヌは日常は単に「ベツ・プッ＝川口」と言っていて、これが地名にもなった。前出の「丙辰日誌」（巻の十）「石カリ運上屋／此処本名はベツツツ則川口と云事なり。」の「ベツツツ」はこのことである。またアイヌ語には日本語と異なり子音で終わる語があり、それを小文字で表現する。また清音と濁音の区別がないので、ベツでもベツでも意味は同じである。

## 引用文献

（本文での引用記事は当日の年次で、文献の編著年とは異なる。）

地理調査所、1953. 2万5千分1地形図 石狩. 昭和25年測図, 地理調査所.

長谷川嗣, 1973. 石狩場所請負人村山家記録. 石狩町史資料第3号, 石狩町史編輯委員会.

北海道, 1989・1992. 新北海道史年表. 北海道出版企画センター.

井口利夫, 2005. 間宮林蔵の東蝦夷地測量—文政上呈図にその足跡を探す—. 伊能忠敬研究, 41: 46-53.

井口利夫, 2007. 伊能間宮蝦夷図の石狩～勇払横断線

- の地名(1)．アイヌ語地名研究，10：1-20.
- 井口利夫，2008．伊能問宮蝦夷図の石狩～勇払横断線の地名(2)．アイヌ語地名研究，11：43-64.
- 今井八九郎，1830年代．蝦夷地里数書入地図．早稲田大学附属図書館蔵．
- 今村治郎橋，1856頃・1994．石狩真景．西蝦夷図巻，北海道大学附属図書館蔵・石狩辨天社史 口絵．
- 伊能忠敬・間宮林蔵，1810年代・2014．大日本沿海輿地全図．(仮)伊能大図写，アメリカ議会図書館蔵・伊能大図総覧，角川新社．
- 石狩町，1972．石狩町誌 上．石狩町．
- 石狩市，1997．石狩町誌 下．石狩市．
- 石川和介，1857．観國録 三．道立図書館蔵／第七分冊 安政丁巳五，北海道大学附属図書館蔵．
- 小林源之助，1792．蝦夷地見取絵図．国立公文書館・蝦夷唐太真景絵図，松平定信旧蔵，北海道大学附属図書館蔵．
- 国土地理院，2006．2万5千分1地形図 石狩．平成18年更新，国土地理院．
- 工藤義衛，2009．明治九年石狩町大火と市街地の形成．いしかり暦，22：9-18．
- 松浦武四郎，1851・1971・1999．三航蝦夷日誌．吉田武三校注，吉川弘文館・校訂蝦夷日誌全，秋葉實編，北海道出版企画センター．
- 松浦武四郎，1856・1996．竹四郎日誌按西扨從(三)．松浦孫太解説，松浦武四郎記念館・竹四郎廻浦日記，高倉新一郎編，北海道出版企画センター．
- 松浦武四郎，1857・1982．丁巳日誌／丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌．秋葉實編，北海道出版企画センター．
- 松浦武四郎，1871・1988．西蝦夷日誌五編 全・新版蝦夷日誌 下．吉田常吉編，時事通信社．
- 陸地測量部，1918．5万分1地形図T 5測図 石狩．国土地理院．
- 榊原銀蔵・市川十郎，1857．野作東部日記．北海道大学附属図書館蔵．
- 札幌市教育委員会，1989．新札幌市史 第一巻 通史一．札幌市．
- 鈴木トミエ，1996．石狩百話．共同文化社．
- 田端宏，2006．井上貫流左衛門と蝦夷地．東京都江戸東京博物館調査報告書18，江戸東京博物館．
- 高木崇世芝，2001．松浦武四郎「刊行本」書誌．北海道出版企画センター．
- 高倉新一郎，1987．北海道古地図集成．北海道出版企画センター．
- 田中實・石橋孝夫編，1994．石狩辨天社史．石狩辨天社創建三百年記念事業実行委員会．
- 遠山景晋，1806・2002．未曾有後記．近世紀行文集成(1)蝦夷編，葦書房．
- 遠山景晋・村垣左太夫，1806・1982．遠山村垣西蝦夷日記．犀川会資料 全，北海道出版企画センター．
- 藪内於菟太郎，1858頃．西蝦夷地イシカリ御場所略絵図．蝦夷全地，北海道大学附属図書館蔵．
- 山田秀三，1965．札幌のアイヌ地名を尋ねて．楡書房．
- 山崎新九郎，1808・1971．西蝦夷地高島日記．道立文書館・新しい道史43，北海道史編集所，北海道．
- 渡辺一郎・鈴木純子・戸村茂昭・横溝高一・竹村基，2014．伊能忠敬の北海道図はすべて間宮林蔵の測量だった！．伊能忠敬研究，74：26．
- 渡辺一郎・横溝高一，2015．伊能忠敬の第一次測量北海道図と最終伊能図(問宮図)の比較．伊能忠敬研究，75：1-19．
- 編著者不明，1750年代．石狩山伐木図(一)．岐阜県立歴史資料館(武川家文書)・飛騨屋久兵衛石狩伐木図(一)写図，北海道大学附属図書館蔵．
- 編著者不明，1788．西蝦夷地分間．近藤重蔵旧蔵，東大史料編纂所蔵(複製＝北海道大学附属図書館蔵)．
- 編著者不明，1810年代・1998．イシカリ川之図．(村山家旧蔵)札幌市藻岩北小学校蔵・刻まれた大地，北海道開拓記念館．
- 編著者不明，1859頃・1989．イシカリ場所絵図面．蝦夷地交易請負場所全図，個人蔵・思文閣古書資料目録第百二十号，思文閣．
- 編著者不明，1859頃・1989．西蝦夷地唐太道中記．北海道大学附属図書館蔵・石狩辨天社史 口絵．
- 編著者不明，1920年代．石狩河口変遷比較平面図，北海道大学附属図書館蔵．